

国際水田・水環境工学会の20年を振り返って—設立時の前後に焦点を当て—
Looking back over the 20 years of the establishment of the International Society of Paddy
and Water Environment Engineering—Focusing on the period before and after its founding—

佐藤 洋平

SATO Yohei, Dr.*

2003年1月1日に産声を上げた国際水田・水環境工学会(International Society of Paddy and Water Environment Engineering, 略称 PAWEES)の20年間の歩みを、その胎動期、創始期、生長期、充実期の4つの時代に分けて、PAWEES 小史を跡づけ回顧する。ここでは胎動期と創始期にとどめ、最後に課題を若干述べたい。

(1) 胎動期(2000年～2002年) グローバル化の動きの1つとして、ワシントン・アコードのもと、技術者資格の品質を保証する教育プログラムを国際認定するようになった。水田農業を基盤とする農業土木技術はもとより学問の体系(以後「水田農業工学」)について国際的な認知を得る上で情報発信が必須である。JSIDREは、JIIDと連携し、「水田農業工学」のアイデンティティの確立を目指し、モンsoonアジアの農業工学系学協会の連携強化の取組みを2000年に開始した。日本、韓国、台湾の3カ国会議を東京で2000年12月に、2001年4月に台北で、同年9月にソウルで開催した。この一連の準備会議の中で国際会議の開催、国際誌の発刊なども話題に上った。JSIDREは2002年3月19日に京都で「水田農業地域における農業工学の技術者育成に関する第1回国際会議」を主催した。ASEAN諸国など12カ国・地域の参加を得て、技術者育成の取組み状況、「水田農業工学」の学術・技術に関する国際誌の発刊などが話し合われ、京都宣言2002を採択した。JSIDREとしては初めての国際会議の主催であったので、事務局のご苦勞は想像に難くない。

京都宣言2002は2003年3月に国際誌を刊行することを謳い、JSIDRE、KSAE(韓国)、TAES(台湾)の3学会が発刊の検討を進めた。準備会合を2002年6月にソウル大学で開き、国際誌の名称と編集方針、出版社との折衝、編集体制、費用分担、発刊計画などを検討した。国際誌の名称をPaddy and Water Environment(以後PWE)とすること、国際的な出版社から出すこと、事務局は3年ごとに日本、韓国、台湾の順で持ち回ること、季刊とすること、国際誌の発行母体としてバーチャルな国際学会を設置し、その名称をInternational Society of Paddy and Water Environment Engineeringとすることなどが提案され、各学会に持ち帰り賛同を得、PAWEESの事務体制などの検討は日本に一任され、事務局をJSIDRE内に置いた。2002年6月開催のJSIDRE理事会は国際誌の発刊への参画を決め、既存の英文誌は2003年の最終号をもって廃刊となった。

(2) 創始期(2002年～2006年) Editor-in-Chief(以後EinC)に佐藤(東京大学)が推挙され就任し、JSIDRE事務局、英文誌編集委員長の3者の協働でPWEの編集体制などの準備を進めた。Springer-Verlag(ドイツ・ハイデルベルグ)との交渉は、主にEinCが、また編集責任者として、原稿の最終チェック、ゲラの校正、著者への採否の文書連絡を担った。編集作業は主にChief Managing Editor(以後CME)の中野芳輔教授(九州大学)の下で行われた。2002年ソウル会議では、初年度はJSIDREが、2年目から国際的な出版社が出版としたが、Springer社に決まってからは同社が提示する出版スケジュールに則り、2003年3月に出版という当初の目標の達成を決意した。Springer-Verlagとの出版契約を結び、編集体制もでき、翌年3月創刊に向けて活動に熱が入った。後日談になるが、JSIDRE事務局から参画した吉武嬢は、このために私費で英会話

* (一社)フードビジネス推進機構、東京大学名誉教授 FABIO, Professor Emeritus, The University of Tokyo
キーワード: PAWEES, PWE, 国際研究

学校に通ったという。敬意を表したい。創刊号は2003年3月に開催された第3回世界水フォーラムの会場でお披露目を得た。韓国や台湾の大学人事にはIFのある国際誌の論文が重視されるという事情もあってか、両国からの投稿論文は少なく、日本からの論文が大半を占める状態がしばらく続いた。質の高い論文の投稿へのインセンティブを期待して、沢田(2004年)、佐藤(2004年)、丸山(2006年)の3先生から頂いた浄財をPAWEES論文賞の副賞に充てた。

PAWEESは2003年1月1日に設立した。会長に佐藤を、副会長にKSAE学会長、TAES学会長、タイ国RID所長を、アドバイザーにIWMI所長、IRRI所長、タイ国王室史を専門とする学士院会員の石井米雄博士を得た、充実した体制である。名誉総裁にタイ国シリントーン王女を招くことを構想し、秋篠宮殿下から当方の意向を王女にお伝え願うために宮家を訪ねた。同席した石井アドバイザーから、活動が充実した段階で依頼するのが好ましいという助言を頂いた。事務局長には松野裕准教授(近畿大学)がこの年の2月に就任した。会員は、法人会員、個人会員、賛助会員から成る。法人会員は各国・地域の学協会を想定するが、現在はJSIDRE、KSAE、TAESの3学会である。会長の任期は、事務局のローテーションに合わせて3年を当初案としたが、韓国の意向で2年とした。会長任期と事務局担当期間の齟齬は、事務局を恒常的に日本に置くという望ましい結果を生んだ。PAWEESは、PWEの刊行、PAWEES賞の授与を活動の柱とした。PAWEES賞には国際、論文、査読の3賞を設けた。「水田農業地域の農業工学技術者育成に関する第2回国際会議」に併せてPAWEES第1回国際会議を2003年3月に京都で開催した。PWE編集などの議論とPAWEES国際賞の授与式が行われた。PAWEES国際会議は翌年の第2回も、PAWEES賞の授与以外は、専らPWEに関する事務的な会合であった。3カ国持ち回りで開催することを基本に、2004年の開催は韓国(安山)、2005年には日本(京都)で第3回が、台湾(台北)で第4回が開催された。2005年に京都で開催された第3回からは研究発表のセッションが設けられ、「バーチャル」から「リアル」な国際学会へと変様した。胎動期、創始期、生長期(2006年～)を経て充実期(2010年～)に入った2012年の第11回まで、「水田農業地域の農業工学技術者育成に関する国際会議」はPAWEESの「孵卵器」と「揺籠」として機能したことを記憶に留めたい。

(3) これからの発展期に向けて(2023年～) PAWEESの今後の発展に向けた課題をここでは2点述べる。第1は、ネットワークの拡充および法人会員の増加である。これまで日本の開催年にはインドネシア、タイ、マレーシアと、開催地を既定の3カ国以外に広げてきた。しかし、国際会議を開催したという実績だけにとどまっている。これらの国々とのネットワークの再構築を図り、他の国々にも広げると共に、CIGR、ICIDなど国際組織との連携の維持に努めることが必要である。2002年に京都で開催された「水田農業地域の農業工学技術者育成に関する第1回国際会議」には12カ国(中国、カンボディア、マレーシア、インドネシア、タイ、ベトナム、ミャンマー、フィリピン、スリランカなど)が参加し、それぞれに国際ジャーナルの必要性を主張していたことを想起すれば、こうした国々にネットワークを広げる可能性は十分に有る。ネットワークを広げることがPAWEESの機能充実と持続化にとって重要に思う。第2に、TAESが試みた学生主体の研究集会を発展させることを期待したい。国際研究集会の企画、運営全てを学生の手で実施することは、そのことだけでも意義があるうえに、ますます重要になってきている国際性を備えた人材の育成にとって良い機会を提供する。

地球環境への負荷の少ない持続可能な水田農業の発展を求める科学知の狩人たちのプラットフォームとして、PAWEESとPWEの今後の展開を期待したい。

*本稿の執筆に際しては、農業土木学会誌に掲載の国際会議報告、会議資料memoを参照したが、誌面の都合上、割愛した。